

当麻遺跡第1地点

(相模原市No.185遺跡)

調査期間 20080401～20090130

所在地 相模原市当麻

時代

旧石器
縄文
古墳
奈良・平安
中世
近世



作成日:20090619

概要

本調査は国土交通省関東地方整備局横浜国道事務所が進めている国道468号(さがみ縦貫道路)建設事業に伴い実施された埋蔵文化財発掘調査です。

8月から出土品整理作業を再開し、遺物の復元や図面作成作業を進めています。

作業は竪穴住居址、掘立柱建物址、その他土坑や溝などの遺構の分布を示す図や、各遺構内や遺跡全体での遺物の分布を示す図などを作成し、それぞれの遺構から出土した土器の実測図などもあわせて作成します。

土器はその多くが破片の状態で見られます。整理作業では、これらの破片を根気よく、ジグソーパズルのように似た色、似た模様をたよりに、割れた箇所同士を合わせ、土器の復元を行います。足りない箇所には石膏を入れ、補強・補完し元の形に復元を行います。復元の出来なかった破片資料の多くは、図化されませんが、特に縄文時代の土器は、その文様の付け方で時期が分かりますので、破片の状態でも特徴を良く表す文様が付けられた箇所の破片は、拓本を取り文様の図化を行います。今回の復元作業では、古代の竪穴住居址から出土した破片から、胴回り50cm強の大型の須恵器の甕が2個体復元されました。さらにこの須恵器は、その特徴から南比企窯(現在の埼玉県比企郡周辺)で作られ



▲C区 H15号竪穴住居出土須恵器(古代)



▲C区 B1層出土石器接合状況

たものであることが判明しました。

旧石器時代の石器も、石器を作った時に出る石屑(剥片)が散らばった形で発見されることが多く、これら剥片を石の種類や特徴で分類した後、剥片同士つけ合わせ接合作業を行います。うまくいくと、元の礫の形まで復元出来るときもあります。今回の整理作業でも完全とまではいかなかったですが、概ね元の礫の形が分かるくらいまで接合出来たものがありました。こうした接合状況を分析することにより、石器の製作工程などを明らかにすることが可能です。

こうして復元の終わった土器や石器は、その形や文様、石器に至っては割れ方などの特徴を含め、図化されます。図化が終わると写真撮影も行います。更には出土品整理担当者が、この遺物は何時代のもので、どんな特徴を持ったものかなどを調べ、原稿を作成します。

こうして出来上がった図、写真、原稿等を編集し、一冊の本(発掘調査報告書)として刊行されます。この報告書は、各都道府県・県内市町村の教育委員会や公立図書館、大学などの研究機関などへ送られ活用されています。

8月に再開し、ここまで進めてきた当麻遺跡の出土品整理作業は、本年度末をもって2度目の中断に入り、再開は再来年度以降の予定となります。



▲C区 B1層石器出土状況(旧石器)



▲実測図作成風景